# 博 士 学 位 論 文

内容の要旨および審査結果の要旨

第　14　号

平成 28 年 4 月

聖　心　女　子　大　学

# は　し　が　き

本号は、学位規則（昭和２８年４月１日文部省令第９号）第８条による公表を目的として、平成２８（２０１６）年2月１９日または平成２８（２０１６）年3月１２日、本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は聖心女子大学学位規程第５条第１項（いわゆる課程博士）によるものであるものを示す。

目　　次

氏　　名　渡邉　晶子（わたなべ　あきこ）…… 11 頁

学 位 の 種 類　博士（文学）

学位記の番号　甲第 31 号

学位授与年月日　平成 28（2016）年 3 月 12 日

学位授与の条件　聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当

審 査 研 究 科　聖心女子大学大学院文学研究科

論 文 題 目　Where Is the Merchant Good, and Where the Grasping Jew?:
A Pragmatic Literary Stylistic Analysis of *The Merchant of Venice*

| | |
|---|---|
| 氏　　名 | 渡邉　晶子（わたなべ　あきこ） |
| 学 位 の 種 類 | 博士（文学） |
| 学位記の番号 | 甲第 31 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 28（2016）年 3 月 12 日 |
| 学位授与の条件 | 聖心女子大学学位規程第 5 条第 1 項該当 |
| 審 査 研 究 科 | 聖心女子大学大学院文学研究科 |
| 論　文　題　目 | Where Is the Merchant Good, and Where the Grasping Jew?: A Pragmatic Literary Stylistic Analysis of *The Merchant of Venice* |
| 論文審査委員 | （主査）　教　授　　安　達　ま　み<br>（副査）　教　授　　中　川　僚　子<br>（副査）　教　授　　中　尾　まさみ<br>（東京大学大学院総合文化研究科） |

## ABSTRACT

This thesis presents an interpretation of William Shakespeare's disturbing comedy *The Merchant of Venice* (*MV*) (1596-1598?), emphasizing the thrilling exchanges between the characters and humorous aspects of the play. The primary questions raised are "whether Shylock is effectively depicted as grasping and Antonio as good" and "why Antonio is left alone at the very end of the play," which are crucial for an overall interpretation of this play. In order to analyze this early modern dramatic text, a pragmatic literary stylistic approach is widely employed. By applying linguistic techniques to the text, this thesis attempts to clarify the intended meanings of the utterances and their effects on the hearers, and demonstrate that familiar scenes can be viewed from diverse angles.

Especially after World War II, difficulties of interpretation of this play, in which a persecuted Jew is overwhelmed by shrewd Christians, have been often discussed. This thesis offers another perspective to the discussion by elucidating the equilibrium between the Christian merchant and the Jewish usurer, as well as hitherto unobserved factors which can be interpreted to be entertaining. Detailed analyses shed a fresh light on the fact that Antonio plays a key role as counterpart of Shylock, being as egocentric as the Jewish usurer. Indeed, the shifting power balance between Shylock and Antonio is one of the highly entertaining factors of this play. The interpretation offered by this thesis does not require any alteration of the text for a performance in order to moderate the sense of unfairness regarding the destinies prepared for the characters.

Chapter 1 focuses on the titular hero Antonio. First, the title pages of the play-text and the name "Antonio" are reviewed. Subsequently, discourse between Antonio and Shylock from the earlier part of the play is analyzed from a pragmatic point of view, closely attending to how they communicate with each other. Antonio's egotism and ridiculous behavior are spotlighted, which contradicts the complimentary remarks on him by other Christian characters. Antonio's insolent words and their inferable effects on Shylock also underline the fact that Antonio is not simply a victim of a malicious plot of Shylock, but the inveterate persecutor of the Jewish man. An analysis of their second encounter, in which Shylock rejects Antonio's plea, highlights how dramatically Antonio's default on a loan reverses their positions.

Chapter 2 focuses on Shylock, and firstly explores the possible causes of prejudiced views against him. It is argued that, from a biblical point of view, Christian characters cannot justify persecuting Shylock; conversely, Shylock has reasons to hate them. The uniqueness of Shylock's language is also discussed. Subsequently, introducing the Discourse Structure of Drama, this thesis argues that there are deliberate manipulators in the play who influence the audience with their biased view about Antonio and Shylock. The Jewish usurer's emotions concerning his family and nation are also high-

lighted. Furthermore, Tubal's unusual way of communicating with Shylock and a probable cause of it will be explained by applying the notion of Indirect Speech Act.

In Chapter 3, the last two acts are analyzed to arrive at a comprehensive interpretation of the play. First, this chapter compares the expressions used in Christopher Marlowe's *The Jew of Malta* and the words of Antonio in the climax of the court scene, and discusses an echo-like effect which was probably deliberately exploited by Shakespeare. Subsequently, the court scene is reexamined in context. Analyzing the process of the defeat of Shylock, Portia's thoughts behind her words, and the Duke's decision to respond favorably to Antonio's requests, this thesis concludes that Antonio's "mercy speech" is indeed his revenge on Shylock. Finally, exchanges between Antonio and Portia in Belmont are examined, aiming to explain the important meaning of the isolation of Antonio at the end. An analysis reveals how Antonio seeks a way to achieve his wish, how kindly but firmly Portia precludes his standing between herself and her husband, and how others respond to them.

Through specific analyses, the following becomes evident: Shylock is not a stereotypical Jewish character, and both Antonio and Shylock are complex and changeable. Antonio is isolated at the end neither without any particular reason nor because of his sexual inclinations: rather, he is expelled from the society to which he wishes to belong as a result of being too willful, just as Shylock is excluded from the Jewish society.

This thesis argues that *MV* is a highly entertaining play in which we can take delight in the dynamics of dialogue. It is revealed that the equilibrium of the two protagonists, Antonio and Shylock, is maintained by the author, suggesting that *MV* is suitable for a modern production, whose audience typically consists of people with different cultural backgrounds. Lastly, providing examples of exploration for fresh interpretations, this thesis demonstrates how useful a pragmatic literary stylistic analysis can be as an approach to a Shakespearean drama text.

# 学位申請論文の審査結果の要旨

学位申請者　渡邉　晶子
論文題目　Where Is the Merchant Good, and Where the Grasping Jew?:
A Pragmatic Literary Stylistic Analysis of *The Merchant of Venice*

審査委員　主査：安達　まみ
副査：中川　僚子
副査：中尾　まさみ（東京大学大学院）

## 1. 論文の要旨

本論文は、現代において問題作とされるシェイクスピアの喜劇『ヴェニスの商人』に焦点を当て、交わされる言葉の奥深さと娯楽性を強調した新たな解釈の可能性を提案する。その際、本作全体の解釈にとって重要な問題を二つの疑問として提示する。すなわち「商人アントーニオは善良な人物として、ユダヤ人シャイロックは貪欲な人物として描写されているか」、及び「なぜアントーニオは終幕において孤立させられるのか」である。その答えとなりうる解釈を導きだすために、Pragmatic Literary Stylistics の分析方法を広く応用した。登場人物の台詞を談話としてとらえ、語用論を含む広義の文体論を用いて談話分析を行う手法である。この言語学の方法論を解釈に応用し、話し手の意図と発話が聞き手に及ぼす影響について、台詞に忠実に詳細な分析を試みる。同時に、この方法論の応用により、先行研究によってすでに多くが解明された場面であっても、新たな切口の解釈が提案できることを実証する。

迫害されるユダヤ人が狡猾なキリスト教徒達に圧倒されるという筋の本作にあって、特にホロコースト以降、解釈や演出の問題が浮上する。本論文では、キリスト教徒の商人とユダヤ人の金貸しとの間には、看過されがちな均衡が存在することを論じ、深刻な解釈が多い場面でも軽妙さを強調した解釈が可能であることを明示する。詳細な分析により、アントーニオがシャイロック同様に自己本位な人物であり、後者の好敵手の役割を果たしていると論じる。実際、刻々と変化する両者の力関係とその比重が本作品の大きな魅力と言える。上演時には、両者の扱いに際立ちがちな不公平感を緩和すべく、改編や演出による工夫がなされるのが近年の常道だが、本論文が示す解釈によるならば、こうした後付けの工夫も不要となろう。

第一章ではアントーニオに焦点を絞り、初演時の様子を推測する材料として初期の出版台本の題扉に着目し、作者の他の戯曲に見られる同名の登場人物について考察する。ついで、劇の前半におけるアントーニオとシャイロックの談話を語用論に則って分析し、二人がいかにコミュニケーションを図り、商談を進めるかを明らかにする。それにより、彼の善良さを毫も疑わない友人達の言葉とは裏腹の言動に及ぶアントーニオが浮かび上がり、シャイロックに浴びせる傲慢な言葉や、それらが相手に与えるであろう影響の大きさが明らかになる。アントーニオはシャイロックの敵意にみちた策略の犠牲者であるだけでなく、自らも執念深い迫害者でもある。シャイロックがアントーニオの嘆願を拒絶する場面では、

債務の不履行が二人の関係をいかに逆転させるかを分析する。

第二章ではシャイロックに目を転じ、彼に対する偏見の原因と考えられる事柄を考察する。聖書の言葉を参照し、キリスト教徒の登場人物達にシャイロックへの迫害を正当化する根拠がないことを確認し、この根拠なき迫害こそがシャイロックのキリスト教憎悪の原因であると論じる。さらにシャイロックの独特な表現を分析する。続いて、2 幕 8 場の談話を「演劇における談話構造」と比較し、巧みな操縦者が存在し、観客を誘導すべくアントーニオとシャイロックに関する偏った評価を聞かせるメカニズムを解明する。シャイロックが口にする家族や同胞への愛にも言及し、彼の発言が間接的言語行為となって、同胞テュバルの言葉に影響を与えている可能性をも示唆する。

第三章では、本作品の包括的な解釈に向けて 4 幕と 5 幕の分析を行う。まず、本作品の法廷場面とクリストファー・マーローの『マルタ島のユダヤ人』に見られる表現を比較し、作者が仕組んだであろう「共鳴」の効果を指摘する。続いて、法廷場面の分析を文脈に沿って行う。シャイロックが挫折へと進む過程、ポーシャの思惑、アントーニオの要求を聞いてシャイロックへの恩赦の判断を変更する公爵の狙いなどを対象とし、アントーニオの「慈悲の弁」は実際にはシャイロックへの復讐であることを導きだす。最後に、ベルモントでのポーシャとアントーニオの談話分析を通じて、すなわち、いかにアントーニオが望みを叶えるためにポーシャやバッサーニオの気を引こうとするか、いかにポーシャが自分と夫との間に割り込もうとするアントーニオの策を封じていくか、いかに周囲の人々が二人のやり取りに反応していくかを分析する過程で、終幕におけるアントーニオの孤独の理由とその意味とを解明する。

以下に本論文の結論を総括する。『ヴェニスの商人』は、技巧に富んだ言葉の応酬と登場人物の動態的な力関係に高い娯楽性を見出しうる戯曲である。アントーニオもシャイロックも、様々な場面で異なる姿を見せる人物として描かれる。シャイロックがユダヤ人社会に留まりえなかったように、アントーニオも自らの願望充足に執着しすぎたために親友の属する集団から疎外され、孤独な終幕を迎える。かくて両者の間には意図された均衡が保たれており、その均衡が作品全体に調和を生み出すため、本作品は多様な文化的背景を持つ現代の観客をも楽しませうる。また、pragmatic literary stylistic analysis を援用して多くの先行研究を持つ本作品に新たな解釈を提案することにより、この手法がシェイクスピア劇の分析に有効であると示しえた。

## 2. 本論文の評価

本論文で第一に評価すべきは、文体論・語用論を用いてシェイクスピアの『ヴェニスの商人』のテクストと誠実に向きあい、詳細な分析を展開し、文学研究に新たな方法の可能性を示した点である。

特に、従来、内外の研究でこの手法が演劇分析に応用される場合でも、現代の作品、しかもその一部分が対象になることが多く、初期近代の作品に徹底的に適用されたことはほとんどない。本論文はこの方法を作品全般に応用することで、pragmatic literary stylistic analysis の援用がシェイクスピア劇の分析に有効であると示しえた、意欲的な試みとなっている。

第二に、きわめて精密なテクスト解釈、論の展開が図られ、かつ、従来のアントーニオ

像及びシャイロック像を見直すにとどまらず、作品全体の新たな解釈をもたらしている点を評価すべきである。テクスト全般に及ぶ登場人物の駆け引き、微妙な心理の変化の精緻な分析・解釈に、とりわけ第二幕の対話の分析や、終幕に舞台上にひとりアントーニオが取り残される必然性を論じた部分に、本論文の独創性が感じられる。

第三に評価されるべきは、一方で英語教育への応用、他方で舞台演出への提案にもなる可能性を有する点である。

第四に、現代の観客のための『ヴェニスの商人』解釈を取り戻した点は特筆に値する。

今後の課題としては、多様な方法論をテクストの分析箇所に応じて使い分ける根拠をより明示的に論証することが望まれる。英語表現はおおむね明晰であると評価されたが、より緻密で説得力ある論述を行うにはいっそうの精進が求められる。とはいえ、本論文に学位論文にふさわしい独自性と拡張性を認めることを妨げるものではないことが確認された。

### 3. 本論文の審査の過程

本論文は、2015 年 11 月 2 日に提出された。同年 11 月 6 日に学長より博士学位申請論文審査の付託がなされ、同年 11 月 17 日より、大学院委員会承認による 3 名（内 1 名は学外審査委員）からなる審査委員会が審査を開始した。2016 年 2 月 8 日には、博士学位申請論文最終試験および最終審査委員会が実施された。審査委員会は 2015 年 12 月 1 日、同年 12 月 8 日、2016 年 2 月 8 日の計 3 回開かれ、厳正な審査を行った。

審査委員会では、着眼点の独創性、語用論・文体論を文学研究に応用する意欲的なとりくみ、テクスト解釈の精密さ、今後の展開の可能性のゆたかさなど、種々の点から評価された。いくつかの問題点があることが指摘されたが、それらは今後の課題とすべきもので、学位論文として充分評価できることで意見が一致した。

博士学位論文
内容の要旨および審査結果の要旨
第１４号

平成２８（２０１６）年４月２６日発行

発行　聖心女子大学大学院
編集　聖心女子大学大学院
〒150-8938
東京都渋谷区広尾４－３－１
電話　03-3407-5811（代表）